

あたまポツピンシャツ
フル！

妖魔夜行@

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アタマがポツピンしてシャツフルしてる小説です。ガルパのデータが消し飛んだシヨックで書いたので自分自身もなんでこんな小説を書いたのかよく分かりません。

あと私は別にたえちゃんが嫌いな訳では無いので悪しからず。

目次

あたまポツピンシヤツフル! | 1

まさか続くとは思ってなかったB y 沙綾

17

あたまポツピンシャツフル！

「これが日常」

幼なじみ、それは美少女。

幼馴染み、それは天使。

幼馴染、それは攻略ルート。

つまりおさななじみとは美少女天使で攻略するものだということが分かる。

「という訳だから沙綾、結婚しない？」

「どういう訳か知らないけどとりあえず帰ってくれないかな？」

「俺と沙綾の愛の巣に？」

「キミだけの家にだよ。もっかい言うよ？ 仕事の邪魔だから帰ってくれない？」

焼きたてのパンをそれぞれの定位置へ置きながら、少年には目もくれず淡々と話す沙綾。

「帰ってくれない……？ それはつまり沙綾が俺を産んでくれるの？」

「待って、なんで帰る帰らないの話から私がキミを産むことになってるの」

「やさしく……してね……?」

「死ね」

もじもじと体をくねらせながら話す少年にゴミを見るような冷たい視線を向けて再びパンを並べる作業に戻る。

焼きたての芳ばしい香りに誘われ、少年がパンに手を伸ばそうとすると沙綾が持つていたトングで少年の頬を思い切り引っぱいた。

「顔!?え、顔!?そこは普通手とか指とかじゃないの!？」

「うるさいよ。というかパンに唾が飛ぶから叫ばないで。むしろ喋らないで、もう息しないで」

「いや流石の俺でも息しないのは」

「しないで」

「いや、だから」

「するな」

「はい」

可愛らしい女子高生のどこからこんなドスの効いた声が出せるのだろうか。ヤクザ顔負けの怖さだった。

あまりの怖さに少年は体が震え、顔を蕩けさせた。

「おい沙綾、あんまり怖い声を出すなよ。感じちやうだろ」

「もう死んでよ…」

疲れたように声を振り絞る沙綾の横で少年が笑う。「H A H A H A！」と無駄にネイティブな発音が余計癪に障る。

「ところで沙綾、もう朝飯食べた？」

「まだだよ。仕込みを終わらせてから食べようかなって」

「そっか。じゃあ俺もご相伴に預かろうかな」

「またなの？」

「迷惑か？」

「正直、弟達に悪影響与えるから一緒にいさせたくないんだけど」

「おいおい、俺が純くん達になにかしたことあったか？」

「あるよ、むしろない事がないよ」

沙綾は覚えている。この少年が保育園に上がったばかりの弟に向かつて「お兄ちゃんはお姉ちゃんのお婿さん」と吹き込んでいたのを。それからしばらく弟達が彼のことを「おむこさん」と呼び、誤解をとくのに時間がかかった。あと少年はもちろん殴った。顔をグーで、何度も。何度も。

「まあまあ幼馴染なんだしき、いいじゃんこれくらい。俊くんたちも懐いてくれてるしや」

「そこが不思議でならないんだよね。なーんであの子達がキミに懐いているのか」

「それはほら……俺から溢れ出る沙綾の旦那様オーラに惹かれたんじゃないの？ ほら未来のお義兄ちゃんとしてさ」

「もう一回言つとくけど私はキミと結婚する気ないからね」

「なん……だと……!?!」

「どうしてそんなに驚けるのかな……だいたいまだ付き合ってもいないのに結婚とか……段階を踏んでよ段階を」

少年の相手をしたせいでもより倍の時間がかかってしまい、いつもより百倍以上疲れてしまった沙綾。自然とため息が出て涙が零れてしまう。だって女の子だもん。

「沙綾の涙！ペロペロしなきゃ!!」

隣で彼女の目じりに浮かぶ涙を必死に舐めとろうしている変態に肘打ちを決め込んでもから沙綾は自宅へ戻る。

「こ、これが、愛のムチ……こばあッ」

「はあく……」

一体自分の幼馴染はいつからこんな変態になってしまったんだろう。

深いため息をついてリビングへ向かった。
これが日常である。

◀ あたまポツピンシヤツフル！ ▶

沙綾「あたまポツピンシヤツフルはまだ続くよ。いやさつさと終わって欲しいんだけどね」

変態「俺と沙綾の物語もまだまだ続くぜ！」

沙綾「消えろ蛆虫」

変身「んギもちいい!!!」

◀ あたまポツピンシヤツフル！ ▶

「ヤンデレス 前編」

「ふんふんふん」

やたら上機嫌で商店街を練り歩くのは言わずも知れた少年。商店街の人達は彼の奇

行に慣れていいのか見向きもしない。

ちなみに少年の服装はゆったりとした白のブラウスに優しい色合いをした黄色のロングスカートだ。

もう一度言おう。少年の服装はゆったりとした白のブラウスに優しい色合いをした黄色のロングスカートだ。

ブラウスに、ロングスカート、だ。

そう、この男。いやこの変態は幼馴染である沙綾の私服を借り、もとい盗み、自分で着て商店街を練り歩いているのだ。最早変態を通り越してただの危ない人である。というか誰か止めるよ。これ奇行じゃなくて最早事故だろ。見向きもしないじゃなくしておぞましくて視界に入れたくないだけだろ。目を逸らすな商店街の住民達よ。

「沙綾の服を俺が着る……これもう実質合体じゃね？おせっせしてると同レベルじゃね？」

ゴミカス野郎はとち狂った発言をしながら商店街を堂々と歩く。時刻は11時ということもあり人は多いのだが花咲川の恥部の周りはモーゼの十戒のような空間が出来る。誰もこの変態に近寄りたくないからである。

「それにしてもこれからどうしようかな。circle行つて沙綾にこの姿を見せてもいいんだけどあそこ変態がいるしなあ。それに万年発情ガチレズサイコパスもいるし

行きたくねえな。いやでも香澄ちゃんとりみりんに会えるなら行ってもいいかもしれない……。よし善は急げだ！決めたらずぐ行くぞ！」

「どこ行くの？」

「circle行つてポピパとRoseliaのみんなにこの姿見せた後に羽沢珈琲店行つて持参した牛乳を飲んで『やっぱり沙綾の乳から絞ったミルクは格別だな！』つて大声で叫んだら小学校寄つて帰る」

「最初に話したのから色々追加されてるじゃん!？」

「あれ沙綾?なんでここに居るの?circle行つたんじゃなかったの?」

「八百屋のおじさんからキミが私の服着て商店街を練り歩いて居るつて連絡もらつたからすつ飛んできたの。何してんの?いつ私の服とつたの?早く言わないと爪剥ぐよ?」
「沙綾の家で洗濯してる時に借りました。使つたら洗つて返そうと思つたんだよ、許して」

「何に使う気だつたの!?!まさかと思うけど下着までとつたりしてないよね!?!」

「それは安心してくれ、水着しかとつてない」

「何一つ安心できる要素がないんだけど。私に君の生死に関わるレベルの力が出せたらな……」

「卵子は出せるのにな」

「ぶっ殺す」

「違うこれ乱神モードだった」

山吹沙綾の真骨頂、その④とか言ってる間に少年の顔面に拳が突き刺さっていく。能面のような無表情で馬乗りになりながらひたすら拳を振るうその姿は修羅を連想させた。

彼女が振るう拳に慈悲はない。あるのは殺意のみ。

そろそろ少年の顔が原型を留めなくなってきた頃、沙綾に声がかけられた。

「何してるんだ沙綾？」

「くたばれくたばれくたばれくたばれ……あつ、有咲。今この世の汚点に制裁を与えていたところ」

そう言いながら沙綾は馬乗りをやめて立ち上がる。彼は轢かれたカエルより酷い顔になっていた。

「コヒュー……コヒュー……」

「大丈夫か、それ？」

「死んでないから大丈夫だよ。本音は死んで欲しいけどね」

やれやれとため息をついて今しがた現れた少女に向き直る。少女の名は市ヶ谷有咲、沙綾が所属しているバンドのキーボードを担当していたりする。

そこそこの面倒くさがり屋で、人見知りでもあるのだが、その体型やツインテールという女の子らしい容姿に反して男勝りな口調と毒舌の持ち主だ。

「そりゃ残念だ。死んだらアタシのものにしようと思つたのに」

「物好きだよねえ有咲は。こんな変態が好きだなんてさ」

「まあアタシはコイツに救われてからメロメロだからな。こいつの為ならなんでも出来るし何でもしてあげれる。金が欲しけりやアタシが働いて集めるし恋人が欲しけりやアタシがなつてやる。職に就きたきやアタシが探してやるし子供が欲しけりやアタシが産んでやる。セックスがしたのなら喜んで身体を差し出すし、気に入らない奴がいるなら直ぐにそいつを殺しに行く。但しその対価としてコイツの人生を貰う。だつて当たり前だよな？アタシの全部を、人生をあげるんだ。ならアタシもコイツの人生を貰わなきゃ割に合わない。アタシは何でもしてあげる代わりに、コイツは全てをアタシに寄越して、アタシが何でもあげる代わりに、コイツはアタシを愛してくれればいい。ああでも子供は欲しいなあ、名前はどする？お前とアタシの名前から一文字ずつとつてけるか？それとも今流行りのキラキラネームに挑戦してみるか？いやでもそんなのでアタシ達の子供の人生を台無しにしたら大変だな。うん普通の名前にしよう、立派な意味も込めなくていいしすくすくと優しい子に育ってくれればいいもん。うんそうだそれがいい。あは、あはは、あはははははっ」

目の光を消して延々と愛の言葉を吐き続ける有咲。仕舞いには幸せな結婚生活を妄想しているのか嬉しそうに笑っている。但しハイライトが消え、狂気に満ちた笑顔だったが。

沙綾は相変わらずだなあと苦笑する。苦笑いで済ませる辺り普段有咲がどれくらいの頻度でヤンヤンしているのか見て取れる。

「はいはい惚気話はそこまでだよ有咲、戻ってきて」

惚気話つてレベルじゃねえぞ！フリーダムかお前。未だ笑い続けている有咲は我に返ると沙綾に謝罪した。

「うふ、うふふふ……あつ、わりい沙綾。何の話だったっけ？」

「あー……迎えに来てくれたんでしょ？すぐ戻ろうか」

「うーん？そうだったっけ……？」

「多分そうだったんじゃないかな」

「沙綾が言うんならそうなのかもな。じゃあ戻る、前によいしょつと」

何とか誤魔化せ、誤魔化、ごまかしたのかこれ？

有咲は地面に倒れている少年をお姫様抱っこで持ち上げた。何をするのか疑問に思った沙綾が有咲に問いかける。

「どうするの？それ」

「道の真ん中で放つとくのも迷惑だろ。家の蔵に寝かしとく」

「ふーん。本音は？」

「蔵の奥に縄と手錠で縛って監禁しようと思う」

「はいダウト。よってコレは没収しまーす」

「あ、おい！そんなあー……」

沙綾から少年を取り上げられ心の底から残念がるような悲しい声を出す有咲。

「全く……こんな変態のどこがいいんだか。有咲、男を見る目がないよ？よりによってコレに恋するなんてさ。コレの幼なじみやつてきた間柄から言わせてもらおうけどやめた方がいいよ。絶対後悔するからさ。それに變に頼り甲斐があったり優しかったりするところがあるからさ、有咲が依存しちゃうよ。こんなダメ男の典型みたいな奴に恋したら有咲の人生が台無しになっちゃうし、そんなの私は見たくないから。これは幼なじみとして私が一生面倒みなきゃいけない存在だと思っただよねー。いやあ嫌だけどね？心底嫌だけどね？でも幼なじみだからしょうがないなー。幼なじみじゃなければしないんだけどなー」

早口で彼の悪口を言つて有咲を正しい道へ戻そうとしている沙綾。しかし後半はどこか棒読みっぽくなっていた。

沙綾の話の聞いた有咲は少し呆然としたあと口を開いた。

「そんな辛いならアタシにしてくれてもいいんだぞ? アタシは大歓迎だしな」

「いやいや、そんな迷惑かけれないって」

「アタシにとつては迷惑どころか夢が叶うから寧ろウエルカムなだけだな。それに言つたら? アタシはこいつだから恋をしたんだ。こいつの為なら全部捨てられるし何でもする。あと……幼なじみはめちやくちや羨ましいポジションなんだぞ」

ジト目を沙綾に向けてる有咲。沙綾は「うっ…」と声を漏らすと小さくゴメンと謝つた。「まあアタシは受け入れてるけど沙綾は受け入れられないんだもん。小さい頃のお前は知らないけどなんかあつたんだろ?」

「まあ……ね?」

あれは……そう、忘れもしない小学二年生の頃の話だ。

「回想なんか入らせねーよ」

「あ、起きたの?」

「なんか恥ずかしい話をされそうな感じがしたんで。てかなにこの状況! 沙綾が俺をお姫様抱っこしてる! じゃあ今度は俺が駅弁抱っこしてあげるから待つてぐべえ!」

変態がふざけたことを抜かした辺りで沙綾はそれを落とした。そして踏んずけた。

「やつぱり沙綾つてSだよねででであああ!! 背骨があ!! 背骨からビスケットを砕いたような音が聞こえるううう!!」

「どーしてキミは息を吐くように下ネタを言ってくるのかなああ?」

「ごめ、ごめ、ゴメス山吹。あああ!!!かりんとうを潰すような音が聞こえたあ!!!」

はたしてどんな音なのか。どちらかと言ったら生卵を踏み潰す音の方が似ていたと思う。『ぐちより』だとか『にちやり』だとか。いやまて、一体何を踏みつけた。

変態は地面をのたうち回っていると淀んだ黒い瞳と目が合った。

「んん?ひいつ!」

「お は な う♡」

「ぎゃああああ!!!ヤンデレ盆栽女ああ!!!」

「酷いなあ。アタシには有咲っていう名前があるんだけど?」

「だれがお前みたいに変態の名前を呼ぶか」

「おまいう」

今世紀最大級のおまいうであった。沙綾の口から息をするように自然と出たおまいうに一同驚愕。いや変態は驚くなよ。

「うう…沙綾もおまいうを言える歳になったのか…これで子供も産めるね」

「そうだね(適当) じゃあ君も埋めなくちゃね」

「早すぎる埋葬!」

「じゃあアタシは墓荒らしか死者蘇生をするか」

「おいバカやめろ」

「あー! いたいた! おーいさーや! 有咲ー!!」

3人が話をしてしていると沙綾と有咲を呼ぶ可愛らしい声が聞こえた。声のする方に顔を向ければ猫耳を模した様な独特な髪型の少女が手を振りながらこちらへ向かって走ってきた。

「おつ、香澄」

「もおー! 遅いよ二人とも!」

「ゴメンね香澄。ちよつとこの変態の相手をしてたら遅れちゃって」

「香澄ちゃんこんにちは。今日も可愛いね」

「あつ! おはよう!」

挨拶が噛み合わない。変態おまと香澄えらはどつちの時間帯にいるんだ。

「沙綾とヤンデレ盆栽ーゲフンゲフン。ヤンデレ盆栽有咲女を拘束しちゃってゴメンね香澄ちゃん」

「わわ! 別に謝らなくてもいいよ!」

「そう? 香澄ちゃんは優しいね。ところでりみりんとクソレズーゲフンゲフン。クソレズ花園はどっこにいるの?」

「え? 今なんて」

「どうしたの香澄ちゃん？俺はりみりんとクソレスサイコパス^花兎女はどこにいるのって聞いたんだけど？」

「うーん聞き間違いかな？2人ならcircleで待ってるよ。行き違いになったら困るから」

聞き間違いではないが香澄は純粹だから仕方ない。そこが可愛いから仕方ない。古事記にもそう書いてあるから仕方ない。

というかお前誰だ。変態じゃなくて爽やかな少年になってしまってるじゃないか。そのせいで、ほら見てみる。

「……………」

「……………」

沙綾は白い目で、有咲は淀んだ瞳で少年を見つめていた。

というか早く沙綾の服を脱げ。

◀あたまポッピンシャツフル！▶

変態「沙綾の服っていい匂いするよね。mgmgしたい」

有咲「アタシの服なら遠慮なくmgmgしたいぞ♡」

少年「抜かせ変態」

作者「おまいう」

◀ あたまポツピンシャツフル!
▶

【あたまポツピンシャツフル!】は、ご覧のスポンサーの提供で、お送りしました。
※（スポンサーはこころが綺麗で年齢が10歳以下の人にしか見えません）

まさか続くとは思ってなかったB Y沙綾

「?天真爛漫こころきらきら?」

?少年は走る——恐怖から逃れるために。

?少年は駆ける——歪んだところを避けるために。

?少年はこける——不幸にも黒服のお付人に追突されてしまったために。

?少年は涙を流す——関節技をキメられたために。

?次に少年は!『いつまで描写してんだてめえ!!』と!言う!!!

「いつまで描写してんだてめえ!!……ハッ!」

「急にどうしたの?電波でも拾ったのかしら?」

「いや何か急に言った方がいいかなって思っ……というかお前に電波とか言われたくないわ!いい加減離しやがれ!」

「いーやー!!やあーメー——デー僕ら分かってよ!」

「人に関節技キメながらゴーストルールDECO*27様が作曲した神曲。イントロか

らもう神。ちなみに作者はこの曲を聴きながら執筆してました。歌ってるんじゃあな
いっ!!あガガガガ!!」

?コブラツイストをかけられながら悠長に喋っている少年も中々だと思うが、そもそも何故女子高生がコブラツイストのかけかたを知っているのだろうか?その疑問は置いておこう。知りたい場合はアイデアロールをどうぞ、成功で1d30、失敗で100d1のSAN値喪失です。

?少女の名は弦巻こころ。端的に言えば超金持ちでバンドのボーカルをしている美少女だ。

?何故そんな美少女にコブラツイストをかけられているのに変態が喜んでいないかと言うと、少年はこころが苦手なのだ。

?少年が好きな女の子と言うと、推しが弱いか、一生懸命努力しているか、美少女かの3つに分かれる。

?こころはこのうちの美少女に当てはまるのだ。勿論努力していると思うが、努力している姿を少年は見たことがないのでカウントされれない。推しが弱いかと言われると鼻で笑えるレベルだ。

「いいいいやあああー!?!今『メキョッ』って言ったアー!『メキョッ』ってなんだよ!?!日常生活では聞かない擬音だよ!?!」

「あら、そうかしら？ 私は今聞いたけど？」

「？ くてんと首を傾げながら答えるところ。その仕草だけ見ればとても可愛らしいのだが、如何せん関節技をキメている最中である。対人術で感情を取りに行くのは止めようね！（戒め）」

「いいからっ！ HA☆NA☆SE！」

「I☆YA☆YO！」

「何が目的だ！ いえ！」

「私の夫になって頂戴！」

「え、嫌です」

「？ 先程までのテンションは果たしてどこへ行ったのか。素に戻った少年を見て頬を膨らますところ。可愛い。」

「むうー！ なんでなの？ 私の家はお金持ちだし、欲しいものなんでも手に入るわよ？」
「いやだって俺の推し沙綾だし。あと俺、沙綾の婚約者だから。日本では重婚は禁止だしな」

「なら私が法律を変えるわ！」

「戦局を変えるみたいなのりで言うことじゃないと思うんですけどそれは……」

「？ ちなみに現在の2人の体制は関節技をキメている体制から解放され少年がこころ

に馬乗りされている状態となっている。おい少年そこ変われ。

?しかし人の印象とはとても不思議なもので——普段頭がおかしい奴が冷静で、近くににいる人が同レベルでやばいと、普段頭がおかしい奴がまともに見えてしまう。

?まあつまり、何が言いたいかと言うと——

「あ」

「ん?ゲツ…」

「あら——おたえじゃない!」

?頭おかしいヤツが増える度にそれが起こってしまう。

「久しぶりだね、万年発情短小包莖童貞。相変わらず頭のネジが吹っ飛んでるね」

「長つながしい呼び名をどうもありがとうクソレズサイコパス兎女。そちらも電波臭はお変わりないようで」

?ニコニコ、ニコニコ、2人は笑顔で話している。笑顔と言っても冷笑だが。

?見つめあった瞳の間には火花が飛び散っている。そしてその火花を使って焼き鳥を調理しようとしている美少女が1人……。

「……何してんだモカ。てか待って、この火花つて焼き鳥作れるほどの火力あるの？」

「おう？あたしに気付くとは中々やりおるね。あくむっ」

「あ、食うんだ」

？モシヤリと焼き鳥を喰いちぎる美少女の名前は、青葉モカ。中々凄い絵面である。

「うげえ…」

「生焼けだったのか……」

？ゲロゲロと焼き鳥を吐き出す美少女の名前は、青葉モカ。かなり酷い絵面である。

？電信柱に手をつけて吐くモカの背を少年が優しく擦る。

「ありがとう……」

「うん。まあ、どういたしまして…」

？なんとも言えない微妙な空気が辺りに蔓延する。因みにこころとたえはと言うと向かい合って少年をこれからどうするか話し合いをしていた。

？『監禁して自分のモノにしたい』派のころと『世界の害だからすぐさま殺すべきそうすべき』派のおたえで意見は拮抗していた。二人とも物騒である。

「だから、あんなゴミは地球にとつて害にしかならないんだからさ。さっさと宇宙の最果てにでも飛ばすべきだよ」

「あら、それなら私が夫にもらって部屋に閉じ込めておけばすむじゃない！」

「ダメだよ。あのゴミは絶対逃げ出す。そうすれば最後、沙綾―ゲフンゲフン。周りの人間に被害がでちゃう」

「それなら大丈夫よ！私が絶対逃がさないように首輪で繋いでおくし、なんなら檻に閉じ込めておくもの！」

「モカ、山吹ベーカリー連れてってくれない？俺この間出禁くらっちゃってさ。1人じゃ入れないんだよね」

「うーむ。パンをいくつ奢ってくれる？」

「10」

「了解」

「？白熱している2人に視線を向けることなく、少年とモカは山吹ベーカリーへと向かって行った。」

「？これはただの世間話なのだが、今回はまだ少年は1度も暴走していない。これならこの回は変態を見なくてすむ……そう思ってたんですか？」

「やつほー☆沙綾ー！未来の夫が会いきたぶげらああ!!!」

「おおう、ナイスコントロール」

? 沙綾の黄金の右から投げられたトングは回転の勢いを緩めず変態の顔面に突き刺さった。それを見てモカはパチパチと手を叩いている。一方の沙綾の表情はと言うと、まるでゴキブリを見てしまったかのような嫌悪感を隠さず表していた。

「なんで来たの? 出禁つったよね?」

「妻の職場に夫が来るのはそんなにおかしいこと—ですわねゴメンなさいだからその振上げたモーニングスターをしまってくださいオナシヤス」

「そもそも、私は、君の、奥さんなんかじゃああ、ないっ!!」

「サルゲツチュ!!?」

? ブオンブオンという音が聞こえるくらい鎖に繋がった鉄球を振り回し、少年の側頭に叩き込んだ。

「はあ…はあ…:モくカく!!なんで連れてきたの!」

「いやくだつてパン10個奢つてくれるって言われたからさ—」

「全く…:今度リサさんに頼んで叱ってもらわなきゃね」

「ええ〜」

? 口ではそう言いつつもモカが堪えた様子はない。

「反省してないね。なら仕方ない、か…:モカ、暫く山吹べーカリー出禁ね」

「…なっ、があっつっつ?!?!」

? 口をあんぐりと開け、目の焦点はあつていない。モカは痙攣を起こしながら膝から崩れ落ちた。

「ふう………あつ、いらっしやいませ!塩バターロール、焼きたてですよー!」

? サラリーマン風の男性がやってきたのだが沙綾とモカ、それと変態の有様を見て全く無駄のない動きで綺麗にUターンをして出ていった。

? それも仕方ない。壁に頭をめり込ませている変態、白目を向きながらヨダレを垂らして倒れているモカ、返り血を浴び血が着いたモーニングスターを握りしめている沙綾。

「あれ?どうしたんだろ……」

? そりゃ誰でも帰るわ。

◀ あたまポツピンシヤツフル! ▶

こころ「あたまポツピンシヤツフルはまだまだ続くわよ!それと、タイトルにあたしの名前が入ってるのになんで出番があれだけなのかしら?納得いかないわ!」

変態「お前みたいに頭がおかしいキャラを動かすのは大変なんだよ。言わせんな恥ずかしい!」

有咲「お前、自分を客観的に見たことはあるか？」

たえ「鏡って道具知ってる？ピカピカで自分の顔が映るんだよ」

こころ「ブーメランも知ってるかしら？」

変態「よし、テメーら表出ろ」

◀あたまポツピンシヤツフル！▶

┌?タイトル回収┐

「よくよく考えるとポピパの良心って香澄ちゃんだと思っただよね」

?唐突に少年がそんなことを言い、市ヶ谷家の蔵にいたポピパメンバー全員が少年の方へ顔向けた。約一名は彼が蔵に入ってきた時点ですつと顔を向けていたのだが。誰とは言わないが。

「いきなりどうしたの？」

「いやだつてさ、こいつ有咲と花園は頭おかしいし沙綾は沙綾でよく暴走するじゃん？りみりんも薫君案件になると暴走するしさ……そう考えると香澄ちゃんが良心だよなーって」

? 有咲もおたえも沙綾も変態が絡まなければ至って普通の女子高生なのだ。原因はお前だ変態。そんなことを知らない香澄は困惑しながら少年に話しかける。

「えつと……褒められてるの、かな？」

「うん褒めてるよー」

「やったー！えへへ……」

「やだ何この子可愛い」

? 両手を上げて喜びを表現したものの、途中で恥ずかしくなったのか頬を染めながら照れくさそうに腕を下ろした。可愛い。

? それを見てムツとした有咲が彼に迫る。

「私の方が可愛いだろ？」

「ハツハツハ、抜かせ変態」

「キミよりは有咲の方が軽度だよ。自覚しろ変態」

? 軽度と言うあたり、有咲も有咲で中々おかしい部類に区切っていることを沙綾は気づいていない。

「んっ……ふう。おい沙綾、急に罵るなよ感じちやうだろ」

「お前ホントそういう所だからな」

? 沙綾は変態絡みになると口が悪くなっちゃうんだ。致し方なし。というかよく幼

なじみ辞めないかと感心するまでもある。

？すると、3人のやり取りをじつと見ていたおたえが口を開いた。

「とうかき、何でここに変態がいるの？誰か呼んだの？」

？おたえの言葉に答えるものはない。つまり彼は誰にも呼ばれてないのに有咲の家の蔵にやってきたのだ。

「私はいつでも大歓迎だけだな。むしろ私が1人の時に来てくれても構わないぞ？」

「沙綾ある所にこの俺あり、だよ☆沙綾がいるならたとえ火の中、水の中、草の中、森の中、沙綾のスカートの中。あと沙綾のな——んでもないです」

？変態が黙つたのは沙綾がドラムスティックを、おたえがピックを彼の頬に掠らせるよう投げたからだ。変態が何を言おうとしたのかは、健全な男性読者諸君なら察してくれるはずだろう。

「はあ……全く、君は下ネタを言わなきや死んじやう病気にでもかかっているの？」

「いや冷静に考えてそんな病気になるわけないでしょ大丈夫沙綾？」

「お前ホントぶち殺すぞ？」

？狂つた変態に正論で返された沙綾の怒りは有頂天に達する。だがしかし、沙綾はまだ耐えられる。これ以上変態が火に油を注ぐような言動をしなければ。

「ああでも確かに病にはかかっているな。恋の病にね！」

「すうー、はあー……」

「すげえ……深呼吸することで何とか耐えている…」

「というか同人でパンじゃなくて他のもの売ってる沙綾に言われたくなぶるああああ
!!?」

「すげえ……波紋の呼吸をすることで山吹に色の波紋疾走をしている……」

? 沙綾の拳が変態の顔! 腕! 胸! 腹! 足! 体全体に突き刺さる!

? 確かに油は注いでいない、注いだのはグリセリンのようだった。そりゃ怒りも爆発するわ。

「……ふう。さあ皆、そろそろ休憩終わりにして練習再会しよう」

「ん、分かった。その前にこいつに止めさすから」

「ちよつと待ってる。こいつを私の部屋に連れて行ってベットに手錠で繋いでくるから」

「香澄、止めて」

「あいあいさー!」

? ポケットからカッターを取り出したおたえと、どこから取り出したのかロープと手錠を手にしながら少年に近づこうとする有咲を止めるために香澄は2人に抱きついた。

実質百合。

「香澄どいて、そいつ殺せない」

「どけ香澄、そいつを私の部屋に連れてくだけだから」

「どっちもダメー!」

? 女3人集まればなんとやら、3人はそれぞれの意見をぶつけあい口論している。約2名の言動は大分おかしいが。

? それを見た沙綾はフツ、と笑って呟いた。

「こうしてみると、確かに香澄が一番良心的で常識人だね。じゃあ、そろそろ止めに行こうか……。 はいはいそこまでだよー」

? 3人の中にもう1人が付け足され、和気あいあいとした雰囲気生まれてくる。

? さて、そんな4人を遠くから見守っている少女が1人いた。

「うち、影薄くね?」

? 空気と化した牛込りみ、その人だった。

◀ あたまポツピンシャツフル! ▶

りみ「うちの出番はどこ……? ここ……?」

作者「正直すまんかった」

ゆり「うちの妹空気にするとかいい度胸してんな、ああ?」

作者「ヒエツ」

◀ あたまポツピンシャツフル!
▶

「あたまポツピンシャツフル!」は、ご覧のスポンサーの提供で、お送りしました。

※（スポンサーはこころが綺麗で年齢が10歳以下の人にしか見えません）